

平成30年度 学校評価報告書

学校名 盛岡第一高等学校

校長名 川上圭一

分野	重点目標	具体的な取組	自己評価		学校関係者評価	今後の改善方策
			評価指標	達成状況		
学習指導	より高い目標を目指しながら、生徒の進路実現に向け、個に応じたきめ細かな指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスを作成し、的確な指導と評価により、学力向上と学習意欲の喚起を目指した授業の改善に努める。 ・生徒による授業評価を実施し、授業への要望等を把握して授業改善等に努める。 ・基礎基本事項の定着と、個々の進路希望に即した応用力の伸長に向け、習熟度に応じた指導方法、学習形態、課題の工夫に努める。 ・観点別評価を適切に行い、授業改善等に活用する。 ・教科指導力の向上を目指し研修を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の内容は理解しやすいと答えた生徒の割合を100%にする。【95%】A ・授業により力がついていると感じられると答えた生徒の割合を95%にする。【92%】A ・基礎力確認調査2年(国語、数学β、英語)の平均正答率を90%にする。【84.3%】B 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の運用能力や文章を書く力など基礎的なりテラシーを生徒が身につける必要がある。 ・観点別評価の評価方法を詳しく知りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスの作成・活用を継続する。 ・生徒による授業評価を集約し、改善事項・要望事項を共有することで授業改善等に役立てる。 ・互観授業、作題検討会・分析会等の各種研修会を活性化し、授業改善および教科指導力向上を図る。 ・上位、中位、下位の各学力層に応じた指導・支援を丁寧に行い、生徒が主体的に学習に向かう力を育てながら学力向上を図る。 ・学年、学級担任、部顧問と連携して家庭学習時間の確保の取組を強化する。
生徒指導	知・徳・体にバランスのとれた人間の育成、責任ある行動で正しい判断力と思いやりの心を持つ生徒の育成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶、交通ルールの遵守等、望ましい生活スタイルを積極的に確立させる。(交通安全指導・登校時生活指導[7回]、整容点検[5回]) ・主体的な生徒会活動と時間の有効活用とともに活気に満ちた部活動の推進に努める。(運動会、スポーツ祭、白聖祭、予餞会の実施等) ・諸活動における生徒観察やアンケート調査を通して、生徒の心身の状態を的確に把握し、適切な支援に努める。 ・いじめ防止等の対策、情報モラル教育の取組を推進し、問題行動の未然防止に努める(いじめに関するアンケート[5回])。 ・生徒指導の取り組みや、学校での生徒の活動についてホームページ等を利用し保護者へ情報を提供するとともに、協力体制をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分によいところがあると答えた生徒の割合を80%にする。【77%】B ・高校生としてふさわしい服装やマナーを身に付けていると答えた生徒の割合を95%にする。【94%】A ・学校は、いじめなどの生徒の悩みや困りごとの相談によく対応していると答えた生徒の割合を95%にする。【94%】A 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感の低い生徒がやや多い点の改善をこれからも図る必要がある。 ・スマートフォンを積極的に利用する方向へ時代が変わっていることも視野に入れる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動や諸行事面談等を活用して生徒理解に努め、生徒個々人が自己肯定感を持てるように支援する。 ・挨拶、交通マナー、情報モラル等の問題について更なる意識の向上を目指し、講座を設けたり、生徒会等を活用し、生徒自身の主体的な取組を推進する。 ・日常の学校生活の中で、常に生徒の状況を把握し、問題を早期に発見して、担任、学年、教育相談、部顧問、管理職、保護者、関連機関等と連携し問題を全体で共有し解決を図る。
進路指導	より高い目標を目指しながら、生徒の進路実現に向け、個に応じたきめ細かな指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・SGH推進課等他の分掌と連携しながら実践的、体験的な活動を通して、生徒の進路意識を啓発する。(東北大学訪問[1年生]、高田病院訪問[1年生]、学年別進路講演会等)・生徒一人ひとりの第一志望の実現を支えるべく担任面談、教科面談を実施する面談句間を年6回設定する。 ・学年、部顧問、他の分掌と連携を密にし、指導的立場に立つ生徒を育てる道筋を共有し、家庭との窓口が誰であっても一高の方針が正しく伝わる体制を築く。(学年進路合同会議 3年2回・1年3回・2年2回実施 + 3年進路担任検討会3回実施)・3年生の平常課外・長期休業中の講習において、生徒自らの希望により講座を事前登録することで、主体的な学びの姿勢を意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校は、生徒の個性を伸ばし、将来への希望を実現させようと努力していると答えた生徒の割合を95%にする。【91%】A ・進路指導を進める際、生徒、保護者と連絡を密にしていると答えた生徒の割合を85%にする。【90%】A ・国際化に重点を置く大学(SGU等)へ進学する生徒の数を80名以上にする。【今年度設定】 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後、地元に戻ってくる人材の育成を視野に入れる必要がある。地元企業を視野に入れる工夫が必要である。 ・進学率が高い高校でのキャリア教育を推進する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らが学習計画を立て、それを達成していく過程を尊重し、時間管理の意識を高め、主体的な学びへの姿勢を育てるように今後も指導する。 ・生徒の未来を大切に考え、SGU等の難関大学を目指す生徒の第一志望を面談等を通じて支えながら、まずは授業を通してその目標を目指すに十分な学力を身につけさせる。 ・入試改革、大学改革等時代の変革の流れを見ながら、2021年度入試以降への対応において、常に本校における最善を模索し続ける。

健康安全指導	健康・体力の保持・増進と疾病の予防及び保健・安全指導の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒保健委員会活動を活性化し、清掃・ゴミ分別指導など環境衛生、安全・美化活動の充実に努める。(大掃除の実施、年3回) ・生徒の健康、安全な生活、事故防止等について、保健講話を通じて、意識の啓発を図る。(年10回) ・カウンセラーによるカウンセリングを実施する。(年間31回) ・生徒に関する定期的な情報交換会を設定し、職員相互の意思疎通を図る。(年4回) ・必要に応じて病院等関係機関との連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校は、生徒が健康で健やかな体をはぐくむために積極的に取り組んでいると答えた生徒の割合を97%にする。【93%】A ・学校は清掃や美化が行き届いていると答えた生徒の割合を80%にする。【87%】A 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が様々な状況に対応して生き延びることが出来る力を養う必要がある。 ・夏の酷暑に対応する策として生徒の軽装や空調環境を考えることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境衛生活動の重要性を認識させた上で、ゴミ分別指導の徹底をはかる。 ・生徒の実態に即した保健講話を実施する。 ・様々な状況を想定して避難訓練を実施する。 ・保護者の理解と協力を得ながら、学校医、スクールカウンセラー等関係機関と連携を密にして、情報を共有する。
その他	理想的なグローバル社会の実現に貢献する人材を育成するために社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決能力等の国際的素養を身に付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・3年間を通してSG課題研究に取り組みせ、学校をあげて探究的な学習を推進する。また、課題研究発表会を実施し、その成果を公開するとともに、生徒のコミュニケーション能力、情報発信力を向上させる。 ・国際的な素養を身に付けさせるため、SG講演会、GTEC受検、英語ディベート、海外におけるフィールドワーク等、多様なプログラムを開発、実施する。 ・他のSGH指定校との交流をはじめ、課題研究の成果を対外的に発信、共有する機会を積極的に設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決のための探究的な学習活動を好む生徒の割合70%以上にする。【71%】A。 ・自主的に留学または海外研修に行く生徒数を30名以上にする。【45名】A ・CEFRのB1～B2レベルの生徒の割合を70%にする。【12%】E 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・SGHの活動を通じ問題解決能力やプレゼンテーション能力がよく育成されている。 ・学校行事等とうまく調整して生徒が海外と触れ合える機会をより多くもてるようにしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果が上がる一方で、その分年々担当者の業務量は増え続けている。指定期間満了後は学年団が中心となって課題研究に取り組むことができるよう、指導体制を整備していく必要がある。 ・ポストSGHに向けて本校の探究活動をどのように行なっていか、海外FWを継続していくのか、当該年度内に必要不可欠な事業項目をリストアップし、年度内に白聖振興費などの予算措置について見直しをつける必要がある。